

Japon, l'archipel de la maison.

## 日本、家の列島

フランス人建築家が驚く、  
ニッポンの住宅デザイン[企画協力]  
建築家、みかんぐみ共同代表

マニエル・タルディッツ氏

## Manuel Tardits

1959年パリ生まれ。1984年ユニテ・ベタゴシックNo.1卒業。1985年より東京在住。  
1988～92年東京大学大学院博士課程在籍(横文彦研究室) 1995年ICSカレッジオブ  
アーツ教授。2006年より同学副校長。芝浦工業大学、筑波大学、東北大学で非常  
勤講師を務め、2013年より明治大学特任教授。

パナソニック 汐留ミュージアムでの開催によせて

## 日本の都市と住宅、その「何故」を解く

幼少期を中央アフリカのカメルーンで暮らし、パリで建築を学んだ私は、1980年代の日本で異文化に出会った。そこでの体験が「何故」という問いに満ちた長い旅の始まりだった。

東京はマクロでは明快だが  
ミクロではカオス的な都市

1970年代末から80年代にかけて、私が学生の頃はフランスには、日本の建築に関する本は少なく、そこに紹介されているのは伝統的な桂離宮などで、近代や現代建築に関する情報はほとんどなかった。その頃、篠原 一男さんと安藤 忠雄さんの展覧会がパリで相次いで開催された。そこで見た建築はこれまで遭遇したことがなく、当時の私には理解できないものだった。なぜあのような形態を発想し、あのような家ができるのか。目の前に不思議な別世界が提示されたように思えた。それは、どのように考えても私には考えつかないものだった。日本の演劇や映画、文学にも関心があった私は、国立学校で建築を学んだ卒

業後に日本に行こうと考え、東京大学の横 文彦研究室に在籍した。言葉が違い、人の感情表現が違い、町の様相も環境もまったく異なる日本に来て、私は新生児になったように感じた。それは異国趣味ではなく、二人の建築家の作品を見た時にも覚えた理解を超えた衝撃だった。こんな町は見たことがない、不思議な町だと思った。なぜこんなにバラバラに見えるのか。人間が作ったものだから何らかの論理があるはずだが、その論理が見えない。しかし人間が作った町だから、謎は解けると思った。謎を解くために、住宅や建築を撮影したり人に会ったり、視聴覚を通して頭に情報を蓄積していった。それは、文化人類学者だった父の手法でもあった。

現在見えている東京は、カオスのように見えるが、見えない論理によって構成されている。ただ、論理やルールが重層化することで、見えにくくなっているだけなのだ。都市や土地、建物の成り立ちには、やはり何らかのルールと意味があると考えべきだ。

東京はマクロの視点で見れば、構造的に作られている。東京をめぐる環状道路は8本あり、その中心は象徴的に江戸城の壕と符合している。また、中心から街道に沿って放射状に鉄道や道路が構成されて

いる。全世界の中で、これほど明快な都市は少ない。

それは、東京の前身である江戸が1603年の江戸幕府開府以降、約30年で大都市に急成長した要因でもある。18世紀初頭には人口が100万人を超えたとされるこの都市は、北京やパリ、ロンドンを抜いて世界最大の都市となった。それは、江戸が大名と武士が住む武家地と、職人と商人が住むグリッドで形成された町人地に分けられ、秩序立って計画されていたからだ。町人地は京都に似た碁盤のマス目に仕切られている。このグリッドを構成する基本単位が「町」。しかし不思議なのは、全体が断片的に構築されているという点だ。断片的に計画するというのは、ヨーロッパ人には理解できない不思議な考え方だ。何故に相反する概念で都市が形成されたのか。

住まいが集積した街は  
どのようにあるべきか

そして日本の住宅は、何故このような住まいになったのだろうか。人間が住宅を造るなら、いくら理解不能に見えたとしても理由がある。私は日本に来てから9回も引っ越しをした。毎回、その理由はさまざまだったが、引っ越しは「何故」を解くための旅であり、寮や下町の民家、住宅団地での暮らしは自分を被験者とした実験場でもあった。そこでの暮らしを観察し、周囲を歩いて地歴や気候、人のいとなみを観察することは興味深かった。篠原さんと安藤さんが設計した住宅は、外国からの慣れていない目で見ると少々奇異に感じられる。しかし、そこには日本の暮らしという背景がある。街は住まいが集積した場所。人は働き、遊び、ショッピングをし、そして自分の家、自分を守る場所に戻る。そこがどのような場所であるべきかを知らなかった。

日本のプライベートな住まいから  
パブリックを考える

日本にはパブリックスペースが少ないとよく言われるが、現代の米国では都市が分断される方向に進んでいる。その代表的なものが、周囲を壁で囲われたゲートッドコミュニティだ。プライベートを優先することで皆がバラバラになり、地域や街が分断されている。しかし、日本には欧米とは異なるパブリック空間があることに気づいた。それは路地。これは家の延長であり、曖昧なゾーン。ここで住民のコミュニケーションが成立し、柔らかな街になる。ヨーロッパではプライベートとパ

ブリックは明確に分けられている。広場では政治的なデモや集会が行われ、公的な活動が営まれる。しかしここでは、私的ないとなみは少ない。日本の名前のない路地では、プライベートとパブリックが曖昧となったコミュニケーションが営まれている。これが、日本の都市をマクロでは明快だが、ミクロではカオス的にしてきた理由だろうか。

20世紀には世界中で有名な建築家が個人住宅の設計も手がけている。しかし基本的に欧米では、建築家は公共施設などは設計するものの、個人住宅を手がけることは少ない。これは、集合住宅には社会性があるが、個人住宅はそうではないと捉えられているからだ。欧米では大学の授業でも個人住宅の設計はカリキュラムに無い。ところが、日本ではほとんどすべての建築家が個人住宅を設計し、個人住宅が建築の分野に入っている。これは、日本ではプライベートな個人住宅に社会性を認め、都市空間にも繋がっていると判断しているからではないか。

私たちは今回、都市と住宅、そしてその関係性の「何故」を解く鍵の一つとして、この展覧会を計画した。企画を実現させたのは、写真家のジェレミ・ステラに加え、建築家のヴェロニック・ウルス、ファビアン・モデュイそして、私を含めた4名のフランス人。ここでは、日本の近現代の住宅建築から優れた作品を複眼的な視点で独自に選定した。パリやブリュッセル、アムステルダムなどの各都市でヨーロッパの人の驚かせた展覧会の巡回帰国展となる。戦後社会の成長の一翼を担ってきた日本の住宅建築約70作品を、多数の魅力的な写真や映像、ドローイング、スケッチ、模型によって紹介する。

mAAch ecute 神田万世橋  
(みかんぐみ、東日本旅客鉄道、ジェイアール東日本設計事務所:2013年)カタ邸スケッチ  
(マニエル・タルディッツ:2007年)

## 日本、家の列島

フランス人建築家が驚く、ニッポンの住宅デザイン

2017年  
4月8日(土)-6月25日(日)

[ 休館日 ] 水曜日(ただし5月3日は開館) [ 開館時間 ] 午前10時～午後6時(ご入館は午後5時30分まで) [ 入場料 ] 一般800円、65歳以上700円、大学生600円、中・高校生200円、小学生以下無料、20名以上団体100円割引、障がい者手帳をご提示の方および付添者1名まで無料、5月18日(木)国際博物館の日は、すべての方が無料です。

[ 主催 ] パナソニック 汐留ミュージアム、朝日新聞社 [ 後援 ] 在日フランス大使館/アンステイチュ・フランス日本、国際交流基金、在日フランス商工会議所、一般社団法人日本建築学会、公益社団法人日本建築家協会、港区教育委員会 [ 企画協力 ] ヴェロニック・ウルス(建築家)、ジェレミ・ステラ(写真家)、マニエル・タルディッツ(建築家)、ファビアン・モデュイ(建築家) [ 会場構成 ] みかんぐみ

Shiodome Museum | ROUAULT GALLERY  
パナソニック 汐留ミュージアム〒105-8301東京都港区東新橋1-5-1  
パナソニック東京汐留ビル4階  
[ お問い合わせ ] NTTハローダイヤル 03-5777-8600  
[ 公式HP ] <http://panasonic.co.jp/es/museum>